

# 幼児の依存行動・攻撃行動に関する縦断的研究

久世敏雄 石黒敬子<sup>1)</sup> 後藤宗理<sup>2)</sup>  
速水敏彦<sup>3)</sup> 今川峰子<sup>4)</sup> 三神廣子<sup>5)</sup>

## I 問題

発達心理学においては研究を進めていく基本となる考え方に変化が現われてきているとされている。Bronfenbrenner (1963)は1931年、46年、63年にアメリカで出版された児童心理学の代表的なハンドブック、マニュアルの内容を比較し、ただ単にデータを集積し、子どもの発達の諸相を記述するという傾向は減少し、仮定されたプロセスや、構成概念を中心に組織的に研究が進められるようになってきていると指摘した。たとえば認知発達の側面でも彼によれば、Piagetの初期の研究に示されるように、子どもの animism, realism, artificialism など幼児の認知の特性を記述するという方法がとられていたが、1963年になると保存、推移律などのような新しい構成概念が登場し、乳幼児の知的活動の様々の側面に適用されたという。彼は、後期のPiagetの理論の特徴を、感覚運動的な機能の出現と概念形成の間に機能的な連続性を考えていること、個々の行動を孤立させて考えず組織的な働きをもったものとして考えていることにあるとした。このような新しい発達研究の理論的課題としては、a) 定義づけの問題、構成概念の妥当化、b) 発達のプロセスと親の影響を概念化すること、c) 現在の環境、状況要因の操作を概念化すること、d) 性、社会階層、文化による差をうまく説明することであるとされた。

ところでこのように、構成概念を中心に発達のプロセスを明確にすること、それに関わる環境要因を明確にし、発達の法則性を導き出すことが発達心理学の中心的な課題となると、研究の方法としては、従来しばしば行なわれていたような、異なる年齢層の子どもを横断的にとら

えて調査するというものでは不十分ならざるをえない。そこでは1)異なる発達プロセスを辿っているものを単なる年齢の違いという要因によって縦系列に並べ、ある発達プロセスの代表として扱うという危険性がある。また、2)それぞれの年齢段階の被験者群をとりまく状況的な要因も過去の経験も等質のものであることを前提として進められるのが普通である。子どもをとり巻く環境的な要因が世代や個人によって異なる可能性があること、従って発達のプロセスも年齢の異なるもの、あるいは個人個人で違っている可能性があることを考えると、研究はどうしても同一の被験者を継断的に追跡していくという形をとる必要が生じてくる。

さて、人格発達とか社会化といわれる領域では、上に述べたような発達研究の最近の動向を受けて依存行動、攻撃行動などそれぞれ社会的な意味合いを持つ行動群を人間の動機づけの指標のひとつとして捉え、依存性、攻撃性（あるいは依存動機、攻撃動機）などのいわゆる社会的動機づけの概念のもとに扱い、発達を捉えるうえでの重要な構成概念のひとつとしてきた。

依存行動、攻撃行動などを人格発達を縦断的に捉えていく上での重要な人間行動の側面として扱っていく際問題となるのは、それらの行動がどのような出現のプロセスを辿るのか、それらの生起と消失のプロセスには、どのような外的条件がかかっているのかという点であろう。

依存行動（あるいは依存性）の年齢、性による違いについてはKagan & Moss (1960)が3才～10才および成人後の依存を比較し、女子の場合には依存の程度が一貫して高いのに対し男子では成人後では依存の程度は弱まっていることを示している。一方攻撃行動についてはKagan & Moss (1960)では依存行動の場合とは反対に、男子では幼児期から成人後まで存続するが、女子では消失することを示している。また我国では津守・横山ほか(1961)が4・5才児の依存行動、攻撃行動の性差を調べ、依存行動は男児より女児の方が多く、攻撃行動は男

- 1) 中京女子大学
- 2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程) 教育心理学専攻
- 3) 大阪教育大学
- 4) 聖徳学園女子短期大学
- 5) 一宮女子短期大学

児の方に多く見られることを示している。

これらの行動の年齢変化、性差を規定している要因としてはKagan & Moss (1960, 1962)は与えられる強化、罰などのコントロールが年齢、性によって異なることを示唆している。Bronfenbrenner (1963)によれば、社会化の領域では子どもの発達と関連する変数として、両親の示す養護(あるいは愛情)と拒否、特定の行動に対する親の賞や罰、モデリングがとりあげられているという。ここではそれらの変数のうち特に親の与える賞や罰の問題をとりあげて検討してみることにする。

さて、攻撃行動、依存行動に対する賞や罰の効果についてはBandura & Walters (1963), Feshbach (1969) Maccoby & Masters (1969), 等が過去の研究結果を総覧している。ここではそれらを参照しながら攻撃行動、依存行動に対する親の行動の効果について調べてみよう。

ところで、既に述べたように発達心理学における研究で構成概念を中心として仮説をうちたて、それを検証するという方法がとられるようになったことに伴い、発達心理学の領域でも盛んに実験的な方法がとられるようになってきた。ここでもまず、実験室事態で確かめられたものを中心にみてみよう。

#### 依存に対する賞

依存に対する促進的な働きかけの効果を直接、実験的に検証した研究はあまり多くはないが、Maccoby & Masters (1969)によれば、依存的な行動をとることに対して報酬が与えられる場合には依存行動が増大(Nelson, 1960)したり、社会的強化に対する反応性が増大(Cairns, 1962)するなど、依存的な行動に対する賞は依存的な行動を増大させることが実験室事態では確かめられている。

#### 依存に対する罰

同じくMaccoby & Masters (1969)によれば、先に挙げたNelson (1960)は依存反応に対することばによる非難はその与え手に対する依存行動を減少させることを示している。

#### 攻撃に対する賞

攻撃に対する報酬の子どもの攻撃行動に及ぼす効果を実験室事態で調べたものにLovaas (1961), Walters & Brown (1963)がある。彼等は、攻撃行動に対する報酬は、攻撃行動を増大させる効果を持つことを示している。

#### 攻撃に対する罰

攻撃行動に対する抑制的な働きかけの効果について実験的に検証したものとしてはHollenberg & Sherry (1951), Brown et al. (1974)などがある。彼等は攻撃に対することばによる非難などの罰がその行動の出現を減少させることを示している。しかしながら前者においては、その効果は一時的なものにすぎなかった。

以上のように、実験的研究においては依存行動、攻撃行動に対する賞など促進的な働きかけはその行動の頻度を増大させ、罰などの抑制的な働きかけは、その行動の頻度を減少させることが示されている。しかしながら、このような実験状況での検証、およびその結果を現実の子どもの問題に直ちに当てはめてしまうことにはなおいくつかの問題点が考えられよう。

第一に、そうした実験状況で与えられるような賞、罰の効果が長期間、他の場面にまで般化して効果を持つものかどうか確認がないことが挙げられる。特に罰の効果については、それが他の場面にまで般化しにくいこと、一時的な行動抑制の効果しか持たないことなどが指摘されているが、少なくとも短期の実験ではそうした点までは確かめられない。

第二に、こうした人工的な状況で与えられる賞、罰など促進、抑制の操作が、どの程度、現実の子どもたちの受ける環境要因を代表しうのか不明確であるという点が考えられる。たとえば実験状況で与えられている罰や賞などの強さが現実の親子関係で与えられているそれらの強さの水準の一部しか代表しておらず、そのため、依存行動や攻撃行動に対する賞や罰の効果を調べたとしても、極めて狭い範囲の強度のそれについての結果を一般化して考えてしまっているという可能性があるかもしれない。

発達心理学における実験的研究は、特定の構成概念を中心に仮説検証的な研究が行なわれるのに伴って採用されるようになったということは既に指摘したとおりであるが、少なくとも現状ではこのようにいくつかの欠点が考えられる。そこで現実の親子関係で以上のような実験状況で得られたのと同様の結果が認められているか調べてみよう。

#### 子どもの依存行動に対する親の促進的な対処

親が子どもの依存行動に対して許容的、促進的であることが子どもの依存行動の程度と正の関係を持つことはSears et al. (1957), Hatfield (1967)で報告されているが、津守・稲毛(1960)では両者は関連性を示していなかった。

### 子どもの依存行動に対する親の抑制的な対処

McCord et al. (1962) では親による依存行動の抑制の強さと子どもの依存の程度の間には正の相関関係があり、依存に対する罰はむしろ依存を強める効果を持っていることが示唆されたが、Hatfield et al. (1967) では両者は関連性を示していないなど、その効果については明確な方向は示されていない。

### 子どもの攻撃行動に対する親の促進的な対処

子どもの攻撃行動の強さと、親の促進的な働きかけの関連を調べた研究は、少なくとも幼児に関するものでは見られず、次に述べる攻撃行動の抑制の問題が中心にとりあげられている。

### 子どもの攻撃行動に対する親の抑制的な対処

Sears et al. (1953, 1957) では親が子どもの攻撃行動に対して抑制的であることは子どもの攻撃行動と負の相関関係があり、親が抑制的であれば子どもの攻撃行動は少ないことが示されたが、この関係はSears (1961) および Hatfield (1967) では確認されていないなど、必ずしも明確な結果が得られていない。

以上のように調査的な研究の結果は実験的な研究の結果とは必ずしも一致しておらず、特に親が子どもの依存や攻撃に対して抑制的であることは、実験場面で概ね認められたような行動の抑制の効果を示していないことが示唆された。このように調査的研究においては親が依存や攻撃に対して抑制的であることが必ずしもこれらの行動の水準の低さと結びついていないことの理由としてはいくつか考えられる。第一は、罰の効果がしばしば主張されているように持続したり般化したりしない性質を持っていることである。従って、家庭で与えられる攻撃に対する罰などの抑制的な働きかけは、家庭のその場面では一応の効果を持つが、幼稚園など家庭外の場面では効果を持たないのかもしれない。第二に考えられるのは、実験事態で与えられる罰などの抑制的な働きかけの程度は比較的穏やかなものであるのに対し、現実の状況で与えられる罰の強さはより大であり、そのために行動抑制の効果を持つことができないなど、抑制の強度、およびその効果が直線的な効果を持っていないというものである。また、方法上の問題として、これらの研究では多くが、親と子どもの変数を同時に測定し、その相関関係によって一方的に親の行動の効果を示そうとするものであったが、親子関係はむしろ相互作用的なものであって、子どもの側の変数と同時に測定された親の変数は必ずしも子どもの行動の先行変数となっていないという可能性

も考えられる。

このような点を考えると、子どもの行動とそれに対する親の行動とを縦断的にとらえ、前年の親の行動が、子どもの次の年の行動に対しどのような効果を持っているか、罰など抑制的な行動の強さとこの効果との関連性はどうか、などの点を確認する必要がある。

そこでここでは短期の縦断的研究を行ない、①幼児期では子どもの依存行動、攻撃行動はどのように現われるか、性差、年齢による変化はどうか、②子どもの依存行動、攻撃行動に対する親の行動はどうか、性差、年齢変化はどうか、③親の行動は子どもの依存行動、攻撃行動にどのような効果を持っているか、の諸点について調べてみることにする。

## II 方 法

### 1. 子どもの行動に対する母親の行動についての質問紙

本研究では、母親が子どもの依存行動ならびに攻撃行動に対してどのような行動をとっているのか、を調べるために、母親に対して質問紙調査を実施した(附票)。

#### (1) 子どもの行動に対する母親の行動についての質問紙の項目決定の手続

親が示す、依存行動に対する促進的な行動および抑制的な行動、攻撃行動に対する促進的な行動および抑制的な行動の程度を問うため、従来の研究を参考にして、それぞれの行動の内容を示している項目を、10項目ずつ選び、質問紙を構成した。

この質問紙について、回答方法、項目の表現、項目の信頼性などの点を検討するために2回の予備調査を行った。その結果、回答方法については、該当項目に「まったく一致する」から「まったく一致しない」までの5段階評定とすることとした。一方、項目の信頼性を検討するために、昭和48年9月に一宮市一宮幼稚園ならびに江南市藤ヶ丘幼稚園に在園中の母親を対象に調査を行った。幼稚園ごとの有効調査数は表1の通りである。得られた資料をもとに質問項目の分析、検討を行った。結果は幼稚園ごとに、年長児男子、女子、年中児男子、

表1 有効調査数

幼稚園	性別	クラス			計
		年 長	年 中	年 少	
一 宮	男	83	72	31	186
	女	69	63	36	168
藤ヶ丘	男	62	87	17	166
	女	67	73	12	152

女子、年少児男子、女子の6群にわけ、

1) 各項目の平均・分散

2) 項目間の内部一致性という意味での信頼性、すなわち、合成得点と個別得点の相関

の視点から検討を行なった。各項目の平均と分散については、極端に反応がかたよって弁別力のないと思われる項目はなかった(結果の提示は省略する)。そこで、つぎに、各々の行動を評定するための10項目の合計点(合成得点)と各項目得点との相関係数を求めたところ、それ自身の合成得点との相関が負になっている項目が、攻撃行動に対する行動を除くいずれの行動にもみられた(結果の提示は省略する)。また、かなり低い正の相関がみられる項目もいくつかあり、これらの観点から項目の検討が行なわれた。そこで、それぞれの行動項目群から2項目ずつ除去し、最終的に附票に示した項目を用いて分析をすることにした。なお、促進行動と抑制行動とは意味的には対応するものであるが依存についても攻撃についても両者の相関は有意でなかったので別々に分析した。

(2) 母親に対する質問紙調査の結果の整理

最終的に分析に用いられた項目のうち、攻撃行動に対する促進的行動についてたずねたものは、(1), (3), (5), (7), (9), (11), (13), (15), 同じく抑制的行動をたずねたものは、(2), (4), (6), (8), (10), (12), (14), (16), 依存行動に対する促進的行動をたずねたものは、(17), (19), (21), (23), (25), (27), (29), (31), 同じく抑制的行動をたずねたものは、(18), (20), (22), (24), (26), (28), (30), (32), である。これら各項目行動群のそれぞれ8項目の合計得点を算出し、それを行動別個人得点とした。

2. 自由遊び場面における幼児の行動観察の手続

(1) 観察項目決定の手続

われわれは、幼児の依存行動、攻撃行動がどの程度みられるかを調べるために、幼稚園での自由遊び場面での行動観察を行なった。従来の研究を参考にして、依存行動、攻撃行動の具体的な観察カテゴリーを設定した。

依存行動のカテゴリーとして、次の4カテゴリーを設け、それぞれ例にあげたような具体的行動がみられた場合に、そのカテゴリーの行動が出現したものと考えた。

- ①身体的に接触する……先生(観察者も含む)や友だちの身体にさわる。だきつく。手をつないで歩く。
- ②身体的に接近する……先生や友だちのそばに近寄る。あとを追う。そばでみている。
- ③注意を求める……先生や友だちにほめられることを求める。先生や友だちに聞いてもらったり、見てもらうことを求める。

④助力を求める……先生や友だちに積極的に手伝いを求める。先生や友だちに同意、指図を求める。

攻撃行動についても、同様に、4つのカテゴリーを設定し、具体的行動がみられた時にそのカテゴリーの行動が出現したものと考えた。

- ①人を対象とした攻撃……たたく。なぐる。押しのける。追い払う。物を投げつける。
- ②物を対象とした攻撃……たたく。なぐる。物をなげつける。
- ③他人に指図、命令、要求をする……威圧的に命令する。
- ④他人を批判したり、悪口をいう……けなす。あざがしをする。告げ口をする。

われわれは、このように設定したカテゴリーが妥当なものであるか、また観察者によって行動の見方が異なることはないか、などを検討するために、昭和48年7月および9月上旬に、幼稚園で自由時間を利用して、観察カテゴリーの検討と観察者の訓練を行なった。参加した観察者は4名で、いずれも発達心理学を専攻する教官、あるいは大学院生である。訓練と討議を重ねた結果、われわれの設定したカテゴリーによって、意図した行動を十分観察できることが明らかとなった。さらに、観察者相互の一致率を依存行動ならびに攻撃行動という大枠について求めたところ、Yule の関係係数で、依存行動では最高0.959、最低0.892、メディアン0.939、攻撃行動のそれは、それぞれ0.959、0.891、0.926であった。これらの結果からそれぞれの観察者の観察の結果は信頼できるものと考えられた。

(2) 行動観察の手続

観察は、幼稚園において、自由遊び場面を利用して、5分間のタイム・サンプリング法によって行なわれた。4名の観察者が1人の子どもを独立に3回ずつ計15分間観察した。したがって、全体としては1人の子どもを12回計60分観察したことになる。

1年目の観察は、昭和48年9月現在で一宮市一宮幼稚園に在園中の年少児を対象として行なわれた。一方観察者は4名であったが、そのうち1名は、1年目と2年目とは異なっている。しかし2年目の最初に行なった訓練において、1年目の一致率とほぼ同様の結果が得られた(結果の提示は省略する)ので、2回の観察の結果は同程度の信頼性があるものと考えた。

結果は1年ごとに分析された。整理にあたって、1回5分の観察を30秒ごと10ブロックに区切り、まず各ブロックで該当するカテゴリーの行動が出現したか否かをチェックした。次にカテゴリーの内容にかかわらず依存行

動あるいは攻撃行動が出現したブロックの数を計算し、それを最終的に出現頻度とみなした。したがって1人当りの出現可能頻度は、依存行動、攻撃行動とも、それぞれ0～120の値をとることになる。

### 3. 調査対象

2回の観察と質問紙調査の対象は、一宮市一宮幼稚園に、昭和48年9月現在年少クラスに在園していた幼児70名（男児32名、女児38名）と、その母親である。最終的には、2回の観察および質問紙の資料が完全に揃った全部で53名分（男児26名分、女児27名分）のデータが分析に利用された。

### 4. 実施期日

1年目の観察は昭和48年9月中旬～12月下旬、2年目は昭和49年10月中旬～昭和50年1月中旬になされた。一方、質問紙による調査は1年目が昭和48年9月中旬、2年目は昭和49年11月下旬に行なわれた。

## III 結 果

### 1. 子どもの行動の変化

まず子どもの依存行動・攻撃行動の出現頻度の変化およびその性差をみるために、男・女各々、年度毎の行動頻数の平均値を算出した（表2）。それによれば、女児

表2 子どもの行動頻数の平均値(M)と標準偏差(SD)

	依存行動		攻撃行動	
	M	SD	M	SD
男				
48年度	13.38	6.69	7.19	5.90
49年度	11.42	6.29	8.31	8.01
女				
48年度	17.59	7.19	3.48	4.09
49年度	14.07	7.25	7.26	10.21

\* P < .05 \*\* P < .01 \*\*\* P < .001

のばあいには48年度から49年度にかけて依存行動は有意に減少し、攻撃行動は有意な増大を示している。また男

表4 依存・攻撃に対する親の促進・抑制行動

		依存行動に対して				攻撃行動に対して			
		促進		抑制		促進		抑制	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男	48年度	20.42	2.95	22.96	5.03	22.92	3.41	22.46	4.07
	49年度	25.62	5.01	19.31	3.75	23.50	3.41	22.42	3.53
女	48年度	22.70	5.12	18.63	4.71	23.22	3.75	20.03	5.67
	49年度	24.67	5.11	17.96	4.81	24.81	2.89	20.33	4.07

\* P < .05 \*\* P < .01 \*\*\* P < .001

※ 促進行動および抑制行動の強さは、それぞれの数値の低さによって示される。

女の比較をしてみると依存行動、攻撃行動ともに48年度にのみ有意な性差が示されており、依存行動は女児に、攻撃行動は男児に多くみられた。

次に各個人の行動が両年度でどの程度一貫しているかをみるために、2回の測定値の相関係数(表3)を求めた。それによれば男女とも攻撃行動については有意な正の相関がみられたが、依存行動については相関は有意ではなかった。

表3 子どもの行動の一貫性(2回の測定値の相関)

	依存行動	攻撃行動
男	.259	.587**
女	.318	.645***

\* P < .05 \*\* P < .01 \*\*\* P < .001

これらのことから、依存行動は3才時には女児に多くみられるが、4才時には減少して男女差はみられなくなること、攻撃行動は3才時には男児に多く、4才時になると女児の攻撃行動の増大に伴って、男女差がみられなくなること、依存行動は3才から4才にかけて、変動が多いこと、攻撃は比較的一貫していることが示される。

### 2. 親の行動の変化

子の依存行動、攻撃行動に対する親の行動の変化をみるため、男女各々について、年度毎の依存、攻撃に対する促進行動、抑制行動に関する測定値の平均値を算出した(表4)。それによれば、依存行動に対しては、男児の親は、促進行動は有意に弱くなり、抑制行動は有意に強くなっている。また女児の親のばあいは促進行動は有意に弱くなっている。攻撃行動に対する親の行動にはあまり大きな変化はみられず、わずかに女児の攻撃に対する促進で有意な低下(数値の増大)がみられるのみである。また男女の比較をしてみると、依存行動に対する抑制行動のみが初年度で女児の方に有意に強かった。

つぎに、各々の親の行動がどの程度一貫しているかをみるために、48年度と49年度の測定値の相関係数を求め

表5 親の行動の一貫性（2回の測定値の相関）

	依存行動に対して		攻撃行動に対して	
	促進	抑制	促進	抑制
男	.050	-.376	.341	.490*
女	.781***	.536**	.345	.567**

\* P < .05 \*\* P < .01 \*\*\* P < .001

た(表5)。それによれば、依存行動に対しては女兒の親の場合には促進、抑制行動ともに有意な正の相関がみられたが、男児の親の場合には相関がかなり低く、また有意ではないが負の相関が示されるなど、個々の親の行動がかなり変動していることがうかがわれる。また攻撃行動に対しては男女とも抑制行動には有意な相関がみられるが、促進行動の相関は有意ではなかった。

これらのことから、依存行動に対しては、親は全般的には抑制的に変化しているが、男児の親の場合にはその変化の仕方がまちまちであること、攻撃行動に対しては、親の行動はあまり変化せず、特に攻撃の抑制については男女ともに、平均値からみても、相関からみても一貫性が高いこと、女兒の親は促進をわずかながら弱めることなどが示される。

### 3. 子どもの行動と親の行動の関連性

1. 2で親・子それぞれの行動の変化について述べてきた。ここでは依存行動、攻撃行動各々について、親・子の行動の対応関係をみている。

#### a) 依存行動について

男女とも親の行動は抑制的に変化しているが、子どもの行動は女兒のみが依存行動の減少を示している。男児の親と女兒の親で異なるのは抑制行動が48年度で男児の親の方に有意に低く、49年度にかけて有意に強められていること、促進、抑制行動の変動が男児の方で顕著であることの2点であるが、このことが依存行動が男児で減少しなかったことと関連しているのかどうかは明らかではない。

#### b) 攻撃行動について

攻撃行動については男児は親、子ともに大きな変動はみられない。女兒の場合には促進行動が弱まり、子どもの行動は増大している。

### 4. 親の行動と子どもの行動の相関関係

全般的にみた親子の行動とその変化の対応関係は3に示したとおりであるが、個々の子どもの行動と親の行動との関連をさぐるため、まず各年度毎の親と子および48年度の親と49年度の子の相関係数を算出した(表6)。

全般に親の行動と子の行動との間の相関は低く、わず

表6 親の行動と子どもの行動との相関関係

	親 子	依存行動に対する行動		攻撃行動に対する行動	
		促進	抑制	促進	抑制
男	同48年度	-.230	-.235	.160	.335
	年49年度	.027	.551**	-.029	.011
	次 年	-.379	.034	-.554**	.240
女	同48年度	-.172	-.002	.039	.316
	年49年度	-.164	.173	.230	.053
	次 年	.158	-.185	-.111	.266

\*\* P < .01

かに49年度の男児の依存行動と親の抑制行動との間に有意な相関がみられ、抑制が小(数値は大)なら依存行動大という関連性が認められたこと、やはり男児の攻撃行動の促進と子の行動との間に有意な相関がみられ、48年度の親の促進行動が大であれば、子どもの49年度の攻撃行動が大きくなっていることが示されたのみである。

以上3, 4でみてきたように、平均値の比較、相関関係などからは、親の行動と子どもの行動との間に明確な関係は認められなかった。仮に親の行動を子どもの行動の先行変数と考えると促進が強いことが、子どもの行動頻数の高いことと、また抑制が強いことが子どもの行動頻数が少ないことと、一義的に結びつくというような事実は認められなかった。また逆に、子どもの行動を先行変数と考えた場合にも同様であった。

ところで今回の調査では子どもの行動と親の行動の測定は両年度ともほぼ同時に行なわれており、双方の関係を因果関係としてとらえるのは困難である。また両年度にわたって相関を求めた場合にも、各々がどこで変化しているのか、親の行動が先に変化して、子どもの行動がそれに伴って変化したのか、その逆なのか、明確にできていないから、それを因果関係としてしまうのはやはり無理がある。ところが親の行動が比較的一貫している事例をひろいだし、子どもの行動の変化に明確な傾向が現われていれば、少なくとも親の行動に変化の少ない場合の親の行動の効果の方向については、かなり明確にすることができるであろう。また子どもの行動についても2年間で一貫している事例をひろいだし、親の行動の変化をみても、少なくとも同じレベルの子どもの行動に対し、親の行動がどう変化するかをみることができよう。そこで以下では、親、子いずれか両年度であまり変化していない事例だけを抽出して調べてみよう。

### 5. 親の行動に変化の少ない場合の子どもの行動の変化

#### a) 依存行動について

表7 親の行動に変化の少ないケース（依存行動のばあい）

ケース	性	子どもの行動		親の促進行動		親の抑制行動	
		48年度	49年度	48年度	49年度	48年度	49年度
85	f	22	25	34	33	19	17
71	f	13	7	33	34	12	14
80	f	17	3	28	30	20	21
18	m	14	7	25	27	23	24
68	f	19	22	23	21	22	23
29	m	11	13	22	22	23	20
4	m	15	0	21	24	22	21
79	f	36	19	20	19	16	18

表8 親の行動に変化の少ないケース（攻撃行動のばあい）

ケース	性	子どもの行動		親の促進行動		親の抑制行動	
		48年度	49年度	48年度	49年度	48年度	49年度
56	f	2	5	26	26	10	12
82	f	7	25	26	25	15	18
51	f	2	2	29	31	13	15
55	f	5	2	29	28	17	19
10	m	17	6	27	27	21	20
19	m	5	2	26	26	20	23
26	m	0	0	26	25	24	21
84	f	4	2	27	27	22	24
18	m	8	4	29	27	27	29
9	m	14	7	27	29	29	26
77	f	1	4	27	26	26	24
25	m	10	21	28	27	25	26
67	f	0	0	20	20	26	27
59	f	1	0	22	21	24	21
3	m	6	10	21	24	22	24
23	m	6	5	22	21	24	23
15	m	3	13	23	21	23	25
20	m	5	3	24	25	24	21
71	f	2	4	19	22	22	20
7	m	2	0	23	24	20	23

親が子どもの依存行動に対してとる促進的な行動、および抑制的な行動ともに2回の測定値に比較的变化の少ないものを取りあげ、その子どもの行動の変化をケース毎に示した（表7）。

親が依存行動に対して非促進的（平均評定値 $>3.5$ ）かつ抑制的（平均評定値 $<2.5$ ）である場合については、ケース71では子どもの行動頻数が減少しているが、ケース85については子どもの行動頻数の減少はみられなかった。

\* ここでは便宜的に、合成得点の変化が促進行動に関するもの、抑制行動に関するもの、ともに4未満（従って平均評定値の変化が $\frac{1}{2}$ 未満）のケースを取りあげた。攻撃行動の場合も同様である。

一方、親の行動が促進行動も、抑制行動も比較的強い（平均評定値 $<2.5$ ）ケース79については子どもの行動頻数の減少がみられたが、促進も抑制も中庸に近いケース18, 68, 29, 4については行動が減少しているものと、変化が目立たないものが折半しており、変化の方向が一定ではなかった。

このように親の行動と子どもの行動の変化との関連は必ずしも明確ではないが、特に親が非促進的、抑制的であるばあいについてみると、子どもの行動が減少しているものとそうでないものとは、ここで得られたケースでは、子どもの依存行動の水準に違いがみられ、子どもの依存行動の頻度の多いものでは行動の減少がみられ

なかった。

b) 攻撃行動について

依存行動の場合と同様に親の行動に変化のあまりみられないケースを選んで表8に示した。

まず攻撃行動に対する親の行動が抑制的（平均評定値 < 2.5）でありかつ促進の弱い（平均評定値 > 3.5）ケースでは子どもの行動頻数の減少がみられ、あるいは49年度の子どもの行動水準は平均値よりも低かったが、促進が中庸であるケース56, 82のばあいにはむしろ行動頻数の増大がみられた。

以上のように依存行動についても攻撃行動についても、親の抑制的な行動の効果は一貫した方向を示していなかった。その効果は子どもの行動水準、親の抑制・促進行動の強さの程度と関連しているように思われたがその関連性はここに得られたデータの範囲では必ずしも明らかにされなかった。一方、親の行動が特に抑制的でない場合でも子どもの行動が減少しているケースも多くみられた。

6. 子どもの行動に変化の少ない場合の親の行動の変化

a) 依存行動について

子どもの依存行動が2回の測定においてあまり変化していないケース\*を選び出し、ケース毎に両年度の依存に対する親の行動の水準の変化を示した（表9）。

表9 子どもの行動に変化の少ないケース（依存行動のばあい）

ケース	性	子どもの行動		親の促進行動		親の抑制行動		
		48年度	49年度	48年度	49年度	48年度	49年度	
20	m	5	5	18	28	22	24	親は依存に対しより非促進的あるいは抑制的に変化
22	m	7	9	23	29	24	19	
16	m	8	10	22	32	32	13	
31	m	10	10	21	27	31	11	
2	m	11	10	21	31	20	20	
6	m	10	13	17	28	22	16	
29	m	11	13	22	22	23	20	より抑制的に変化 より促進的に変化
24	m	13	13	21	27	26	19	
9	m	23	22	16	14	8	16	
82	f	12	12	27	31	10	11	
68	f	19	22	23	21	22	23	
85	f	22	25	22	25	34	33	
84	f	23	20	19	19	21	21	

\* 行動の出現の程度に差がないと考える行動頻数の差の限度はここに得られた資料では明確ではないので便宜的に頻数の差が3以内のケースをとりあげた。

男女別にみても、男子の場合には子どもの行動があまり変化しない場合でも親の、依存に対する行動はより非促進的あるいは抑制的に変化しているケースが多くケース20, 22, 16, 31, 2, 6, 女子の場合には全般に親の側に目立った変化はみられなかった。また特に男子で親の行動が抑制的な方向に変化していないケースは、子どもの行動水準の高いものの方にみられた。

このように、ここで得られた結果は全般的には平均値の分析によって表わされた男児に対する親の行動の抑制的な方向への変化の傾向を示しており、子どもの行動水準に変化がない場合にも、子どもの年齢の変化に伴って親の行動が変化していることを示している。ただこのうちケース9については子どもの行動レベルも男児としては極めて高く、親の促進、抑制行動も極めて高い、特殊なケースと考えられるので、更に詳しく調べてみる必要があるだろう。

b) 攻撃行動について

子どもの攻撃行動の出現頻度あまり変化のみられないケースについて、親の行動の変化を示した(表10)。男児の場合には、子どもの攻撃行動が一貫して高いケースでは、親の攻撃に対する行動は非促進的あるいは抑制的な方向に変化している(ケース29, 5, 28)が、あまり子どもの行動水準が高くないケースでは親の行動の変化には一貫した方向がみられなかった。また女兒の場合には全般に親の行動の変化の方向と程度は様々で、子どもの行動水準との関連も明確



表10 子どもの行動に変化の少ないケース（攻撃行動のばあい）

ケース	性	子どもの行動		親の促進行動		親の抑制行動	
		48年度	49年度	48年度	49年度	48年度	49年度
26	m	0	0	26	25	24	21
2	m	0	2	21	25	18	21
22	m	0	3	15	19	22	24
27	m	0	3	24	19	26	30
1	m	2	0	23	17	10	14
7	m	2	0	23	24	20	23
16	m	2	1	18	23	25	17
21	m	4	7	21	25	20	21
19	m	5	2	26	26	20	23
20	m	5	3	24	25	24	21
23	m	6	5	22	21	24	23
29	m	10	12	16	24	22	22
5	m	14	15	20	21	20	16
28	m	22	23	21	26	28	21
68	f	0	0	22	21	26	20
65	f	0	0	16	26	21	19
67	f	0	0	20	20	26	27
83	f	0	1	27	26	8	14
62	f	0	1	23	19	24	24
86	f	0	2	22	28	19	20
66	f	0	2	23	27	22	19
79	f	0	3	23	26	26	18
59	f	1	0	22	21	24	21
77	f	1	4	27	26	26	24
51	f	2	2	29	31	13	15
71	f	2	4	19	22	22	20
56	f	2	5	26	26	10	12
70	f	3	0	22	23	31	22
69	f	3	3	23	23	16	26
84	f	4	2	27	27	22	24
53	f	4	5	21	20	27	19
55	f	5	2	29	28	17	19
57	f	7	7	24	27	13	21
80	f	10	7	18	26	23	24

ではなかった。これは平均値の上からは子どもの行動は減少し、親の促進行動は弱められていることを考えあわせると、子どもの行動の変化と親の行動の変化とが女兒の場合には並行して進んでおり、子どもの行動が増大し、親の促進行動が弱められているケースが多いことを示唆するものかもしれない。そこで子どもの行動変化のみられる場合についても親の行動の変化を調べ、それらの変化の方向によって分類し、各々のケースの数を表11に示した。それによれば促進行動については、子どもの行動が増大している場合には弱められているケースが多いが子どもの行動が減少しているケースではむしろ強められている。しかしながら、抑制行動については促進行動と

同じ変化の方向は示されなかった。

#### IV 要約と討論

本研究では幼稚園の自由遊び場面での依存行動、攻撃行動と、親のそれらの行動に対する促進的、および抑制的行動の縦断的な調査を子どもの3才児クラス在籍時から4才児クラス在籍時にかけて行ない、その分析を試みた。

その結果、子どもの行動の性差および年齢変化については、次のことがわかった。3才時には依存行動は女子に、攻撃行動は男に多くみられるが、4才時には女子の依存行動の減少、攻撃行動の増大に伴い、性差は目立

表11 女児の攻撃行動と攻撃に対する親の行動の48年度から49年度への変化

		親の行動の合成得点の変化						計	
		促		進		抑			
		+	○	-	+	○	-		
		(~-4)	(-3~+3)	(+4~)	(~-4)	(-3~+3)	(+4~)		
子どもの行動頻数の変化	+	(+4~)	0*	2	4	0	4	2	6
	○	$\begin{pmatrix} + & 3 \\ & 1 \\ - & 3 \end{pmatrix}$	1	15	4	4	13	3	20
	-	(~-4)	1	0	0	1	0	0	1
	計		2	17	8	5	17	5	27

\* 各セル内の数字はケースの数

たなくなった。また行動の一貫性をみると依存行動は変動が大きく攻撃行動は一貫性が高かった。

このような結果は、4・5才児で依存、攻撃行動に性差を認めている津守・横山ほか（1961）の結果とは異なっていたし、Kagan & Moss（1962）の女子の依存性は高いまま維持され、男子の方は成人になるに従って減少する、男子の攻撃性は高いまま維持され、女子の方は、減少していくという結果とも異なっていた。

親の行動の性差・年齢差については、以下のとおりであった。依存行動に対する親の行動については3才時では男児よりも女児の親の方が抑制的であるが、4才時では男女とも促進行動も抑制行動もより抑制的な方向に変化している。しかしながら親の行動の一貫性をみると、女児の方ではかなり一貫性が高いのに対し、男児では平均値の上では抑制的な方向に変化しているものの、その変化の仕方にはかなり個人差のあることがわかる。また攻撃行動に対する親の行動については、性差も年齢変化もあまり顕著ではなく、女児の親の攻撃促進行動が3才時から4才時にかけてわずかに弱められることだけが示された。この変化は、ケースにもどってみてみると、子どもの行動水準が増大しているものの方にみられた。

これらの結果は、Kagan & Moss（1962）の、依存に対しては男子の方に抑制が強く、攻撃に対しては女子の方に抑制が強いとした考えとは異なっていた。しかしながら、女子で行動水準が増大しているケースでは親の促進行動が弱められていることを考慮すると、女児の場合には攻撃行動が或る一定の水準を越えると、親の行動はかなり非促進的、抑制的な方向へ変化するものかもしれない。

さて、依存行動については男児の方に変動が多くみられたが、これは男児の親の依存行動に対する行動の変動の大きさと対応していた。これに対し、女児の場合には

親・子ともに変動はあまりみられなかった。また平均値の上からは、男子は女子よりも、3才時には抑制行動が弱かったが、このことは男子の依存が強くないことと関連しているのかもしれない。

攻撃行動については、子の行動の一貫性は、男女とも高かったが、親の行動は抑制の方でのみ一貫性が高く、促進行動についてはあまり一貫していなかった。また平均値からみると、女児の行動の増大と促進行動の減少とが対応している。このことは行動の増大によって促進行動が弱められたことを示唆しているように思われる。

親と子どもの行動の相関関係については、明確な関連性は多くは示されなかったが、4才時の男児の依存行動と親の抑制行動が有意な相関を示しており、依存が強いほど、親の行動は非抑制的であるという関係が示された。また49年度の男児の攻撃行動と3才時の親の促進行動との相関が有意であり、促進が強いほど、子どもの攻撃行動は大であるという関係が成立していた。

さらにケースにもどってみてみると、依存、攻撃いずれにおいても、親が抑制的である場合の子どもの行動水準の変化に一貫した方向はみられず、子どもの行動水準、親の促進・抑制行動の水準の高さと関連して変化しているように思われた。また母親の質問紙への回答が抑制的な方向を示していない場合でも、子どもの行動水準に低下のみられるケースもあった。このような、親の行動と子どもの行動との間の一義的でない関係は、現在までに成されてきている調査研究が、両者の間に明確な関連性を示していないことと一致している。

調査的研究と実験的研究との結果の違いに関係する要因として賞や罰の効果の持続性や般化の問題のほかに、①与えられる賞、罰の強さの水準の問題、②実験的研究が因果的關係を反映しているのに対し、調査的研究は多

くが同時測定による相関関係を反映していること、が考えられることは既に述べたとおりである。本研究ではこれらの点を考慮し、縦断的に親と子どもの行動を捉え、比較的因果的に考えやすい形で両者を比較した。しかしながらその結果は既に述べたとおり、親の抑制的な行動の効果は、子どものそのクラスの行動の強さや、親の抑制行動の水準と関連をもつらしいことが示唆されたものの、全般としては個人差が大きく、明確な関連性を得るには至らなかった。

さて、人格発達の領域では、Sears et al. (1953) 以来、依存性、攻撃性などを重要な構成概念としてとりあげ、親の一般的養育態度、依存性、攻撃性などに対する態度との関連を明確化しようとする研究が数多くなされてきた。しかしながらそれらの研究は、そこに費された労力の大きさにも拘らず、必ずしも十分な成果を収めてきたとはいえない。それに対して従来しばしば指摘されてきたのは親の態度や子どもの依存性、攻撃性の測定法上の問題であったが、それ以外に、もう少し別の問題点もあったと思われる。

改めて指摘するまでもなく、依存性、攻撃性は二次的な、学習された、あるいは社会的な動機づけとしてしばしば扱われてきた。そのため専ら動機づけの強さとしてそのクラスに分類される行動群の総体的な量がとりあげられ、具体的にどんな行動が、誰に対して示されるかはあまり問題にされてこなかった。しかしながら、依存行動にせよ、攻撃行動にせよ、対象によって、示される程度が違ふことは周知の事実である。高橋 (1968 a, 1968 b, 1970, 1973, 1974) は既に一連の研究で、依存性を、a) 依存行動の様式、b) 依存行動の向けられる対象、c) 依存要求の強度、の3つの側面から記述し、その発達的な変容のプロセスを示そうとしている。ここでとりあげたような依存、攻撃と外的な要因との関連をさぐる場合にも、依存、攻撃の具体的な行動項目 (高橋のいう行動の様式にあたる)、およびその行動の向けられる対象を考慮に入れていく必要があるように思われる。その際、子どもの依存、攻撃行動に対して向けられる行動についても、具体的に、どの行動に向けられた促進あるいは抑制行動であるかを考慮していく必要があるのはいうまでもない。

このように考えてくると、それらの行動に与えられる賞や罰、いかえれば社会的な強化が、どのような効果を持つかが問題となってくる。この点については第一に社会的な刺激が強化としての機能を果たしうるかどうか、第二に石黒 (1975)、後藤 (1976) が指摘したような、与えられた社会的な強化刺激をどのように受けとるかという認知的な要因の2つがかかっているとと思われる。

第一の点については、最近の乳児研究が指摘するように、乳児期のいわゆる初期経験の問題が、第二の点については知的な発達の問題が、関連してくるものと思われる。

従来、依存性、攻撃性は、情緒、あるいは動機づけの発達として、認知発達の問題とは全く切り離して考えられる場合が多かったが、今後は両者を関連づけて問題にしていく必要があるだろう。

以上のように、与えられる強化刺激が効果を持つかどうかには乳児期の経験が関連すること、子どもの行動に対しての周囲の行動の質が変化していくこと、それらの子どもの受けとり方が変化していくことを考慮に入れると、乳児期から、より組織的にデータを集積していく必要があるように思われる。

## 文 献

- Bandura, A. and Walters, R. H. 1963 *Social learning and personality development*. Holt.
- Bronfenbrenner, U. 1963 Developmental theory in transition. In H. W. Stevenson (Ed.) *Child Psychology*, Univ. of Chicago Press.
- Brown, D., Reschly, D., and Salers, D. 1974 Using group contingencies with punishment and positive reinforcement to modify aggressive behaviors in a Head Start Classroom. *Psychol. Record*, 24, 491-496
- Cairns, R. B. 1962 Antecedents of social reinforcer effectiveness. Progress Report, USPHS research grant. M-4373
- Feshbach, S. 1970 Aggression. In P. H. Mussen (Ed.) *Carmichael's Manual of Child Psychology*. Wiley.
- 後藤宗理 1976 社会的強化に関する研究——強化随伴性についての意識性を中心として——*教心研*, 24, 88-96
- Hatfield, J. S., Ferguson, L. R., and Alport, R. 1967 Mother-child interaction and the socialization process. *Child Developm.*, 38, 363-414
- Hollenberg, E. and Sherry, M. 1951 Some antecedents of aggression and effects of frustration in doll play. *Personality*, 1, 32-43.
- 石黒敬子 1975 社会的強化について——Gewirtz-Bear 仮説の再検討——*教心研*, 23, 78-86
- Kagan, J. and Moss, H. A. 1960 The stability of passive and dependent behavior from childhood through adulthood. *Child Developm.*, 31, 577-591
- Kagan, J. and Moss, H. A. 1962 *Birth to Maturity:*

幼児の依存行動・攻撃行動に関する縦断的研究

- A study in psychological development.* Wiley.
- Lovaas, D. I. 1961 Interaction between verbal and nonverbal behavior. *Child Developm.*, **32**, 329-336.
- Maccoby, E. E. and Masters, J. C. 1970 Attachment and dependency. In P. H. Mussen (Ed.) *Carmichael's Manual of Child Psychology*. Wiley.
- McCord, W., McCord, J., and Verden, P. 1962 Familial and behavioral correlates of dependency in male children. *Child Developm.*, **33**, 313-326.
- Nelson, E. A. 1960 The effects of reward and punishment of dependency on subsequent dependency. Unpublished manuscript, Stanford Univ.
- Sears, R. R. 1963 Dependency motivation. In M. Jones (Ed.) *Nebraska symposium on motivation*. Lincoln: University of Nebraska Press. 25-64
- Sears, R. R., Maccoby, E. E., and Levine, H. 1957 *Patterns of child rearing*. Evanston, Ill.: Row, Peterson.
- Sears, R. R., Whiting, J. W. M., Nowlis, V., and Sears, P. S. 1953 Some child-rearing antecedents of aggression and dependency in young children. *Genet. Psychol. Monogr.*, **47**, 135-234.
- 高橋恵子 1968 a 依存性の発達の研究：Ⅰ——大学生女子の依存性—— 教心研, **16**, 7-16
- 高橋恵子 1968 b 依存性の発達の研究：Ⅱ——大学生との比較における高校生女子の依存性—— 教心研, **16**, 216-226
- 高橋恵子 1970 依存性の発達の研究：Ⅲ——大学・高校生との比較における中学生女子の依存性—— 教心研, **18**, 65-75
- 高橋恵子 1973 女子双生児における依存性の発達 教心研, **21**, 242-247
- 高橋恵子 1974 生活史にみる依存の発達 教心研, **22**, 1-10
- 津守 真・稲毛教子 1960 幼児の依存性に関する研究 教心研, **7**, 210-220
- 津守 真・横山峰子・磯部景子・下坂雅子・仁科弥生・長坂和弥 1961 親子関係と幼児のパーソナリティの発達 教心研, **9**, 129-146
- Walters, R. H. and Brown, N. V. 1963 Study of reinforcement of aggression III. Transfer of responses to an interpersonal situation. *Child Developm.*, **34**, 563-572.

附 票

1. ご記入くださる方は、お母さんをお願いします。やむをえず他の方がご記入くださる場合には、子どもさんとの続柄を下におかき下さい。

続柄 \_\_\_\_\_

2. ご記入いただいた調査用紙は、返信用封筒にいれ、お子さまから担任の先生に11月30日（火）までにご提出くださるようお願いします。
3. 下の欄の必要事項を御記入下さい。この欄も調査の参考資料として大切な箇所ですから記入もれのないようにして下さい。

お子さまについて	1) 性 別  男 ・ 女	2) 年 令  __才__ヵ月	3) 兄弟の有無※  兄 ( ) 姉 ( ) 弟 ( ) 妹 ( )
お母さまについて	4) 職業の有無※※  有 ・ 無	5) 年 令  _____才	6) 祖父母との関係 ※※※ 同居 (祖父・祖母) 別居

1) 4) 6) は該当するところを○でかこんで下さい。

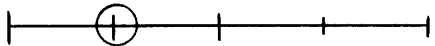
※ ( ) 内には兄が何人、妹が何人というように数字をいれて下さい。

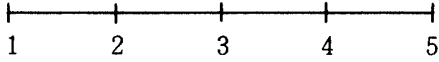
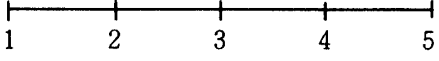
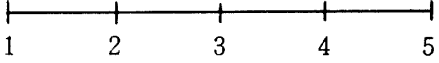
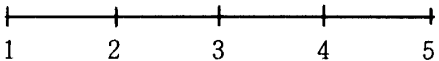
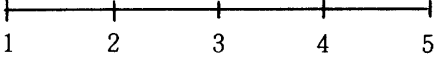
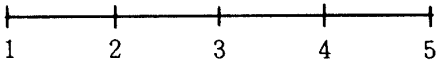
※※ パートタイムは含みません。

※※※ 同居の場合は誰と同居しているのかを答えて下さい。

幼児の依存行動・攻撃行動に関する縦断的研究

- 1 親が日ごろ子どもに接する態度・行動を具体的に1から32までの項目にまとめてみました。それぞれの項目について、あなた自身が幼稚園に通っているお子さまに示される行動とまったく一致する場合は1.まったく一致する、だいたい一致する場合は2.だいたい一致する、まったくちがう場合は5.まったく一致しない、まったくくではないがあまり一致しない場合は4.あまり一致しない、どれともきめがたい場合は3.どちらともいえない、のどれか1つに記入例のように○印をつけて下さい。全部で32の○印がつくことになります。

<p>記入例</p> <p>新しいことは、はやくから教えるようにしている</p>	<table style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">一 ま 致 つ た く</td> <td style="text-align: center;">一 だ 致 い す た る</td> <td style="text-align: center;">い ど え ち ら な い</td> <td style="text-align: center;">一 あ ま 致 し り な い</td> <td style="text-align: center;">一 ま 致 し た く な い</td> </tr> </table> 	一 ま 致 つ た く	一 だ 致 い す た る	い ど え ち ら な い	一 あ ま 致 し り な い	一 ま 致 し た く な い
一 ま 致 つ た く	一 だ 致 い す た る	い ど え ち ら な い	一 あ ま 致 し り な い	一 ま 致 し た く な い		

- |                               | <table style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">一<br/>ま<br/>致<br/>つ<br/>た<br/>く</td> <td style="text-align: center;">一<br/>だ<br/>致<br/>い<br/>す<br/>た<br/>る</td> <td style="text-align: center;">い<br/>ど<br/>え<br/>ち<br/>ら<br/>な<br/>い</td> <td style="text-align: center;">一<br/>あ<br/>ま<br/>致<br/>し<br/>り<br/>な<br/>い</td> <td style="text-align: center;">一<br/>ま<br/>致<br/>し<br/>た<br/>く<br/>な<br/>い</td> </tr> </table> | 一<br>ま<br>致<br>つ<br>た<br>く      | 一<br>だ<br>致<br>い<br>す<br>た<br>る      | い<br>ど<br>え<br>ち<br>ら<br>な<br>い      | 一<br>あ<br>ま<br>致<br>し<br>り<br>な<br>い | 一<br>ま<br>致<br>し<br>た<br>く<br>な<br>い |
|-------------------------------|---|---------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 一<br>ま<br>致<br>つ<br>た<br>く    | 一<br>だ<br>致<br>い<br>す<br>た<br>る   | い<br>ど<br>え<br>ち<br>ら<br>な<br>い | 一<br>あ<br>ま<br>致<br>し<br>り<br>な<br>い | 一<br>ま<br>致<br>し<br>た<br>く<br>な<br>い |                                      |                                      |
| 1. 仲間にいじわるされたらやりかえすようにさせている   |   |                                 |                                      |                                      |                                      |                                      |
| 2. おとなには逆らわないようにさせている         |   |                                 |                                      |                                      |                                      |                                      |
| 3. 友だちに命令したり指図したりしても注意を与えない   |   |                                 |                                      |                                      |                                      |                                      |
| 4. 激しくあばれたり走りまわったりしないようにさせている |   |                                 |                                      |                                      |                                      |                                      |
| 5. 家の中で騒いだりしても放っておく           |   |                                 |                                      |                                      |                                      |                                      |
| 6. 物をこわしたりしないようにさせている         |   |                                 |                                      |                                      |                                      |                                      |

原

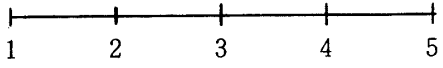
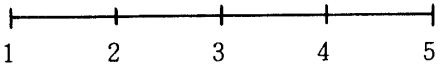
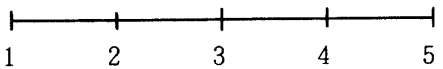
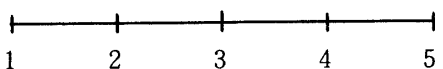
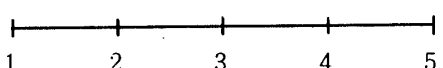
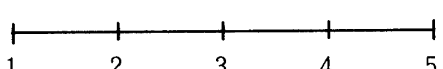
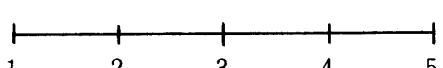
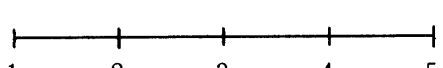
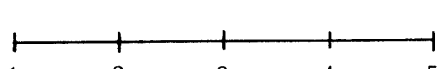
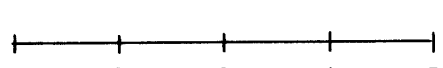
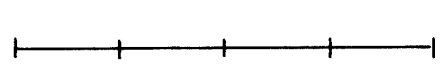
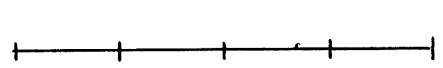
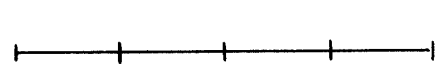
著

一致する  
まったく  
一致する  
だいたい  
一致する  
いえない  
どちらとも  
一致しない  
あまり  
一致しない  
一致する  
まったく

- |   |  |
|---|--|
| 7. かんしゃくをおこした時は放っておく                        |  |
| 8. ケンカは理由がどうであろうとやめさせている                    |  |
| 9. 少しぐらいのケンカは当然だと教えている                      |  |
| 10. 残酷なテレビや読物は見せないようにしている                   |  |
| 11. 怒った時はその場で自分の感情をださせるようにしている              |  |
| 12. 友人どうしではわがままな態度はとらせないようにさせている            |  |
| 13. 時には人をおしのけてでも、自分のやりたいことをさせている            |  |
| 14. 遊んでいるとき友だちをいじめないようにさせている                |  |
| 15. 手さえ出さなければ悪口を言いあうのはたいしたことではないと言っている      |  |
| 16. 生き物をいじめたり、傷つけたりするようなことがあれば厳しくしかるようにしている |  |
| 17. 子どもがあまえてきても、あまり抱いたり、おんぶしたりしない           |  |
| 18. 幼稚園へ行くときは、いつも一緒につれていく                   |  |
| 19. 仲間の中で、自分の考えを主張できるようにしている                |  |

幼児の依存行動・攻撃行動に関する縦断的研究

一ま 一だ いど 一あ 一ま  
致 致 え 致 致  
す た いた ち し した  
る た す ない も ない なく

- |                                       |  |
|---------------------------------------|--|
| 20. おもちゃなどなくなると、よく一緒にさがしてやっている        |    |
| 21. 夜はいつもひとりで寝させる                     |    |
| 22. 外に出かける時は、手をつないで歩くようにしている          |    |
| 23. 洋服の着替えはいつも自分でするようにさせている           |    |
| 24. 夜ねる時は、寝つくまでそばにいるようにしている           |   |
| 25. 子どもが手助けを求めてきても、できるだけ自分でやるようにさせている |  |
| 26. 何かをするたびに「これでいい」と聞くようにさせている        |  |
| 27. 親の意見ばかり聞きにこず、できるだけ自分で判断するようにさせている |  |
| 28. 子どもがあまえてきたら、なるべく抱いたりおんぶしたりしてやる    |  |
| 29. 友だちのいいなりにならないようにしつけている            |  |
| 30. 洋服を着せてと行ってきたら着せてやる                |  |
| 31. 幼稚園へ行く用意はすべて自分でさせている              |  |
| 32. 手助けを求めてきたらたいてい手伝ってやる              |  |



## A LONGITUDINAL STUDY OF DEPENDENT AND AGGRESSIVE BEHAVIORS

Toshio KUZE, Keiko ISHIGURO, Motomichi GOTO, Toshihiko HAYAMIZU

Mineko IMAGAWA and Hiroko MIKAMI

This report was based on the short-term longitudinal study designed to investigate the following problems:

- a) Did dependent and aggressive behaviors of the preschool children change?
- b) Was parental behaviors to their children constant?
- c) How did parental behaviors influence on behaviors of children?

Ss were 26 boys and 27 girls in the nursery school and their mothers. Both of them were repeatedly investigated when the children were in the three-year-old class and the four-year-old class. Children's behaviors, such as dependent and aggressive, were checked in 12 five-minute observations, while the parental permissiveness and inhibitiveness were measured by questionnaires for mothers.

The results were as follows:

- 1) Girls showed more dependent behaviors than boys, while aggressive behaviors appeared in boys more than girls. Both boys and girls were constant in their aggressive behavior.
- 2) Parents of girls had consistency of their permissiveness and inhibitiveness to dependent behavior. And parents exhibited constant inhibitive behavior against aggressive behavior of both boys and girls.
- 3) Children's behaviors were not clearly related to the parental permissiveness and inhibitiveness. Then behaviors of the parents getting constant scores were compared with their children's behaviors. Parental inhibitive behaviors were related to the decrease of the frequency of children's behaviors.